

はちがつじゅうごやげつぜん きゅうかた  
八月十五夜月前に舊を語る (菅原道真)

秋月不知有古今 一條光色五更深  
欲談二十餘年事 珍重當初傾蓋心

しゅうげつ 秋月は 知らず 古今 あるを

解説 八月十五日、二十七歳の少内記であつた道真が、月見の宴で詠んだ詩。

いちじょうの 光色 五更 深し

語釈 ※八月十五夜Ⅱ中秋の名月。※不知Ⅱ知らない。※古今Ⅱ昔と今。※一條Ⅱひとすじ。※五更Ⅱ夜明けの時刻。一夜を五分した時刻の名称。秋は午前二時半すぎから五時頃までの時刻に相当する。※珍重Ⅱめずらしくて大切なこと。※當初Ⅱ初めから。

だん 談ぜんと 欲す 二十 餘年の 事

※傾蓋Ⅱたまたま会うこと。

ちんちょうす 珍重す とうしょ 當初 けいがい 傾蓋の ことろ 心

通釈 中秋の名月は昔と今の違いを知らないように変わりなく輝いている。一筋の月の光の下、明け方まで、幸いにも二人は二十余年の思い出を語り合っている。願わくば、この月の光のように、二人の友情を、いつまでも持ちつづけたいものである。